

サンプソン・リード：エマソンと スウェーデンボルグの連結環

大 賀 睦 夫

I. はじめに

ラルフ・ワルド・エマソン（1803-1882）がスウェーデンボルグの熱心な読者であったことはよく知られている。エマソンは、多くの論文で頻繁にスウェーデンボルグに言及し、『代表的人間像』においては、歴史上の6人の「代表的人間」のひとりとしてスウェーデンボルグを取り上げて論じた。また、日記の全体に目を通せば、スウェーデンボルグへの言及が生涯途切れることなく続いていることがわかる。しかし、エマソン研究者が実際にスウェーデンボルグの著作にあたって、「いかに」エマソンはスウェーデンボルグの影響を受けたかを検証するということは、ほとんどなされていないようである。⁽¹⁾ 今日にいたるまで、スウェーデンボルグのエマソンへの影響は過小評価されていると思われる。

もちろん、スウェーデンボルグのエマソンへの影響がまったく指摘されないわけではない。かつて斉藤光はエマソン選集の訳者あとがきで次のように書いた。「カルビン主義を毛嫌いしたエマソンは、ピューリタン神学をあまり読まず、自分と同時代のスウェーデンボルグ主義者サンプソン・リードの著書に接し、さらに、スウェーデンボルグ自身の著書を読むことにより、対応関係について影響されたい⁽²⁾」。エマソンの著作の中心概念である *correspondence*（対応関係、相応）が、スウェーデンボルグからリードを経てエマソンに伝わったと

(1) Hallengren (1988), p. 230 参照。

(2) 斉藤光編訳 (1960), 279 ページ。

いうこの解説は、まさにそのとおりなのであるが、「らしい」と書かれているように、その事実は直接関連文書にあたって確認されているわけではないであろう。しかし、確認されなければ、エマソンについて正確なことはいえないのではないかと思う。

スウェーデンボルグが読まれない理由は、スウェーデンボルグ自身とエマソンの両方にあるのかもしれない。この世とあの世を自在に行き来したというスウェーデンボルグの証言は、常軌を逸しており、信じられないと思われるであろう。⁽³⁾一方、エマソンはスウェーデンボルグを賞賛したものの、必ずしも手放しでは賞賛しなかった。『代表的人間像』では、彼の天才を賞賛すると同時に、彼の神学に辛らつな批判を加えている。「砂をかむような散漫さ」「論理が支離滅裂」「臨終の病人のうわごと」「もはや読まれることはないだろう」といった非難はスウェーデンボルグを読もうという気持ちを萎えさせるのに十分である。⁽⁴⁾

しかし、「エマソンは自分が影響を受けた人物ほど強く攻撃する傾向があった」という指摘には十分注意しておく必要がある。⁽⁵⁾エマソンのスウェーデンボルグに対する攻撃ばかり見ていると、彼がスウェーデンボルグに多くを負っているという事実を見失いかねない。実際、エマソンの『自然』が匿名で出されたとき、イギリスの新教会の読者は、それを書いたのは新教会の仲間であるに違いないと信じるほどだったのである。⁽⁶⁾

エマソンがスウェーデンボルグに親しむきっかけをつくったのは、齊藤も指摘するように、 Sampson Reed (1800-1880) であった。リードはハーバードの神学生時代にスウェーデンボルグの著作に接し、強い影響を受けた。1821年、リードはハーバードの神学校を卒業する際、卒業礼拝のスピーチを行う学生に選ばれた。3歳年下のエマソンは、このスピーチを聴いて深い感銘を受けた。エマソンがリードの考えに接したのはこのときが最初である。そして、リ

(3) Swedenborg, (1749), no. 5 参照。

(4) 酒本雅之訳 (1961), 85, 107 ページ参照。

(5) Hallengren, op. cit., p. 230.

(6) Hallengren (1988), p. 95.

ードが1826年に出版した『心の成長に関する観察』によって、エマソンのリードに対する傾倒は決定的なものになった。リードの著作はエマソンの座右の書となり、そこに説かれていた相応というスウェーデンボルグ神学の独特の概念がエマソンの著作の中核をなすようになった。⁽⁷⁾

本稿では、とくにエマソンの中心概念である相応に焦点を合わせて、スウェーデンボルグ、リード、エマソンの影響関係を可能な限り正確にあとづけてみたいと思う。

Ⅱ. サンプソン・リードの生涯

スウェーデンボルグとエマソンについてはすでに多くの紹介がなされているので、あまり知られていないリードについてここで略歴を書いておくことにする。

サンプソン・リードは1800年6月10日にマサチューセッツ州ブリッジウォーターに生まれた。リード家は、代々、カルヴァン主義の牧師の家柄であったが、彼の父親は予定説の問題でカルヴァン教会を離れ、50年にわたってリベラルなユニタリアン教会の牧師を務めた。サンプソンは14歳でハーバード神学校に入学し、父親同様、ユニタリアン教会の牧師をめざしていた。たいへん優秀な学生であったので将来は約束されたかに見えたが、ルームメイトのトマス・ウースターとの出会いが人生を大きく変えることになる。

1815年の夏、ウースターはエマヌエル・スウェーデンボルグの著作という奇書があり、それは聖書のまったく新しい解釈をおこなっていること、そしてキリストの再臨はすでに霊界で起こったと主張しているらしいことを知る。好奇心に駆られて、彼はハーバードの図書館をくまなく探し、ついに「博物館」

(7) 相応はもちろんスウェーデンボルグの発明したことばではない。スウェーデンボルグがしばしば語る「人間は小宇宙である」という相応の考え方は、新プラトン主義にもウパニシャッド哲学（梵我一如）にもある。スウェーデンボルグ自身、相応は最古代人の知識であり、現代人には失われた知識であると述べている。彼はいわば古代の知識を発見したわけである。しかもそれは漠然としたものではなく、詳細で徹底的なものであった。エマソンはリード、スウェーデンボルグをとおして相応について学んだ。

と呼ばれるワニの剥製などの詰まった隔離された場所で『天界の秘義』その他のスウェーデンボルグの著作を見つけた。その中には、「主の僕エマヌエル・スウェーデンボルグ」という銘の入ったものもあったという。⁽⁸⁾

5万冊の蔵書を誇るハーバードの図書館で、スウェーデンボルグの著作だけが追放されていたという事実には彼は興味をもち、学長の特別の許可をもらって持ち出し、リードたちクラスメート数人と「著作」を読み始めた。そしてスウェーデンボルグの著作のとりこになった。

リードは1820年、大学院生のときに「将来の報いについての自然の光からの証拠」という論文を書いた。これはスウェーデンボルグの影響を受けたリードが、キリスト教の神学者たちは聖書を自然の光の下で解釈していると批判したものである。

1年後、1821年に修士課程を修了する際、彼は卒業礼拝のスピーチを行う学生に選ばれ、「天才についての演説」Oration on Geniusというスピーチを行った。ここでの天才 genius とは偉大さ greatness という意味である。前述のとおり、卒業礼拝に出席していたエマソンはこのスピーチに深い感銘を受けた。後年、エマソンはこのスピーチを振り返って次のように記している。「私はたいへん興味をもったので、後日、リードのクラスメートであった兄のウィリアムに依頼して彼の原稿を借りてもらい、それをまるごと写して宝物にしていた」⁽⁹⁾。原稿をまるごと写して宝物にしたとは並々ならぬ傾倒ぶりである。エマソンはこのスピーチのどこに魅かれたのであろうか。

注目されるのは、このスピーチの中に宗教、科学、芸術をひとつと捉える見方が明確に示されている点である。リードは述べている。「神が愛であるから、自然が実在する。神が愛であるから、聖書は詩である。では、もし神の愛が自然の風景を造るなら、神の愛にもっとも心を開く者が、自然の美にもっとも鋭敏であってはならないということがあろうか。実際、自然の中に、諸々の科学と芸術が表現されているのである」⁽¹⁰⁾。リードは自然の中に神の愛を見た。自然

(8) Shaw (1992), p. iii.

(9) Emerson (1982), p. 184.

に自然を超えるものを見るというエマソンの主張の源はすでにここにあるといえよう。

さて、リードはハーバードの卒業礼拝のスピーチを行う栄誉を与えられるほど優秀な学生であったが、就職につまずいてしまう。当時、ニューイングランドのピューリタンの、あるいはユニタリアンの雰囲気の中では、スウェーデンボルグの著作は強い猜疑の目で見られていた。リードはスウェーデンボルグの思想をスウェーデンボルグの名前を出さず、できるだけ普遍的なことばで語って賞賛を受けたわけであるが、いつまでも本心を隠し続けることはできなかった。いずれ教義的な問題に直面せざるをえないのであるから、スウェーデンボルジャンでありながらユニタリアンの牧師にはなることはできないと彼は覚悟を決めた。新教会のグループもできつつあったが、ごく少人数であり、そこではウースターが牧師になる予定であったので、新教会の牧師になることもかなわなかった。そこで教職につくことを希望したが、スウェーデンボルジャンとわかると、これも妨害され、結局、彼はボストンの薬店の見習いとして働くという道を選ぶほかなかった。

希望の仕事にはつかなかったが、スウェーデンボルグの著作への愛着と執筆意欲は衰えることはなかった。1826年、リードは「将来の報いについての自然の光からの証拠」と「天才についての演説」の議論をさらに展開した著作『心の成長に関する観察』を発表した。これは好評を博し、1826年から1886年の間に10版を重ねた。先述のとおり、エマソンはこの書を繰り返し読み、これを基礎にして彼の執筆活動を開始するのである。彼のこの書への傾倒ぶりは、1826年9月10日の日記に明らかである。

アメリカの出版界から、サンプソン・リードの『心の成長に関する観察』のような、まさに賞賛されてしかるべきと思われるような本が出てくるとは、そうしばしばあることではない。それは私にとっていわば啓示であ

(10) Reed (1992), p. 14.

る。その中で明らかにされている真理の豊かさ、真理の斬新さはそのようなものなのである。⁽¹¹⁾

リードをとおして、スウェーデンボルグ神学の相応は、超越主義の重要な概念となった。しかし、リードとエマソンはスウェーデンボルグの相応の解釈をめぐってやがて対立するようになる。しかし、それは先の話なので本稿の最後で扱うことにしよう。リードについていえば、1838年、彼は自らスウェーデンボルグジャンであるとはっきり宣言したために、その後は著作を一般の出版社から刊行することはできず、以後、彼の著述活動は新教会関係の雑誌への投稿にとどまった。

Ⅲ. スウェーデンボルグの相応

さて、リードとエマソンが自らの著作の中心にすえた相応 *correspondenita* の考え方は、スウェーデンボルグによってどのように説明されているかという問題から始めよう。スウェーデンボルグ神学とは、すなわち相応による聖書解釈なのであるから、その膨大な神学著作の中で相応に関わらない部分を探すことが難しい。しかし、彼がとりわけ相応に力点を置いて叙述している部分があるので、そこを中心に要約してみたい。その箇所は、『天界の秘義』の第23章から第43章の各章の末尾に置かれた霊的体験の覚書、聖言の内的意味を解説した『真のキリスト教』第4章、意志と心臓、知性と肺の相応について述べた『神の愛と知恵』の第5部などである。それらの要約といえるのが、『天界と地獄』第12章、13章である。

1. 相応とは

スウェーデンボルグの神学著作を読む際に念頭に置いておきたいのは、神学者になる以前、彼はヨーロッパを代表する科学者・哲学者のひとりであったと

(11) Emerson (1963), p. 45.

いうことである。彼の神学著作には、科学的知見が含まれ、また彼自身の哲学が濃厚に反映している。相応は啓示であるが、また彼の自然哲学の一部でもあった。相応を説明するために、彼は次のように、存在についてのもっとも根本的な問題から始めている。「なにものも、それ自身で存続することはできない。みずから先立つもの、すなわち、はじめにあるものによって存続する。それから切り離されたら、たちまち消滅してしまう⁽¹²⁾」。

スウェーデンボルグによれば、この世の万物は原因と結果の関係によって存続する。原因は霊界で、自然界はその結果である。自然界は霊界によって存続するのである。そして両者を結ぶもの、それが相応である。一般的に、彼は相応を次のように説明している。「霊的なものと自然的なものとの間には相応があり、相応によって両者は結びついている」。

ただし、相応はいろいろな種類に分けることができ、それについて彼は詳細に論じている。また、彼が相応を知るに至った経緯や、相応は古代人の知識であるといった説明もしている。そこで、以下に相応についての論点を整理しておきたいと思う。相応について取り上げるべき事項は次の諸点である。

- ・ 内部人間と外部人間の相応（情愛と表情の相応、知性や意志と身体の行為の相応）
- ・ 天界にあるすべてと人間にあるすべてとの間の相応
- ・ 天界にあるすべてと地上にあるすべてとの間の相応
- ・ 相応によって明らかになる聖言の内的意味
- ・ 相応は最古代人の知識
- ・ 相応は霊界で得られる知識

2. 内部人間と外部人間の相応

人間には内部と外部があり、たがいに相応している。人間の内部とは霊人で

(12) Swedenborg (1758), no. 106.

あり、外部とは自然人である。両者の相応の一例をあげると、たとえば顔に表れる心の中の感情のようなものである。感情という霊的なもの（とスウェーデンボルグはいう）は、表情という自然的なものとなって表れる。スウェーデンボルグによれば、これは相応によって生じるのである。その結果「顔は人間の自然的世界の中の霊的世界」となっている。同様に、人間の理性は言語に、人間の意志は肉体の態度・動作に表れる。このように、人間における自然の世界、つまり肉体・感覚・動作が、霊の世界、つまり精神・知性・意志によって生じる場合、これを相応と呼んでいる。これはもっともわかりやすい相応の説明である。

3. 天界にあるすべてと人間にあるすべてとの相応

相応はそればかりではない。全天界と個々の人間との間にも相応がある。この世では秘義に属するとスウェーデンボルグはいうが、天界は全体として見ると、ひとりの人間の姿（巨大人）になっている。おおまかに言えば、最高の第三天界は頭部から首まで、中間の第二天界は胸から腰および膝まで、末端部の第一天界は、両足と足の裏、両腕と両手の指までを形成している。そして体の各部に該当する社会が、人体の該当箇所に対応している。頭に位置する社会は、人体の頭に相応し、胸に位置する社会は、人体の胸に相応し、腕に相応する社会は、人体の腕に相応する。人間は、このような相応によって存在し続ける。なぜなら、人が存在しているのは、天界による以外にはないからである。

天界の巨大人の中で、頭に該当するところにいる者は、それ以外の者にまして、あらゆる善のうちにいる。つまり、愛・平和・無垢・英知・理知およびそこから来る喜びと幸福の中にいる。彼らは人間の頭と、その諸器官の中に流入を与えており、その部分に対応している。同様に、胸にあたるところにいる者は、愛と信仰の善のうちにおいて、人間の胸部に流入を与えており、その部分に対応している。巨大人の中で、腰や生殖機能にあたるところにいる者は結婚愛の中にいる。目にあたるところにいる者は知性を、耳にあたるところにいる者は、よく聞き従う心を、鼻にあたるところにいる者は、感知力をもっていて、

相応する器官に流入を与える。その他についても同様である。

頭が理知や英知を表すこと、愛している人を胸中の友といい、感知力がすぐれていることを「嗅覚が鋭い」、理知的な人を「眼光鋭い人」などというのは相応からきている。人はそれに気づいていないが、これらは霊の世界に由来するのである。

天界の流入は、体のはたす機能や役立ちのためである。役立ちは霊の世界から来るもので、自然の世界にあるものとおして形づくられ、そこに結果を生じる。

4. 天界と地上の万物との間の相応

天界と地上の万物との間にも相応がある。地上の万物は三つに分類される。動物界、植物界、鉱物界である。動物界は生命があるという点で、第一級の相応があり、植物界には、増殖するという点で、第二級の相応があり、鉱物界には生命も増殖もないという点で、第三級の相応がある。これらはすべて相応によって存続している。

この世の自然的なものが天界の何に相応するかは、相応の知識が失われたために現在知られていない。それは天界に導かれて知るほかないとスウェーデンボルグはいう。彼によると、地上の動物は各種の情愛に相応する。おとなしく有益な動物はよい情愛に、乱暴で無益な動物は悪い情愛に相応する。牡牛や子牛は自然的な心の情愛に、羊と子羊は霊的な心の情愛に相応する。鳥は、その種類に応じて、自然の心と霊の心の両方からくる知的なものに相応している。象徴の教会であったイスラエルの教会で、燔祭など、犠牲の動物が神にささげられたのも相応による。日常会話において、おとなしい人は羊、野蛮な人は狼、ずるい人は狐・蛇などと呼ばれるのも相応による。

植物界の相応もこれによく似ている。庭園は天界の理知、英知に相応している。だから天界は楽園といわれる。畑から刈りいれられる穀物は善と真理の情愛に相応するが、それは食糧がこの世の自然のいのちを養うように、善と真理の情愛は霊のいのちを養うものだからである。聖餐式でパンとぶどう酒が用い

られるのも相応による。パンは神の善、ぶどう酒は神の真理を表す。個別の植物にも相応がある。聖書によく出てくるオリーブは天的善を、ぶどうは靈的善を、いちじくは自然的善を表す、等々。

5. 相応によって明らかになる聖言の内的意味

現代人にはわからなくなっているが、スウェーデンボルグによれば、実は聖言は相応によって書かれている。したがって、聖言の文字の意味の内部に靈的意味が隠されている。そしてこの靈的意味こそ聖言を神聖にするものである。聖言の文字の意味は、靈的意味を入れておく箱でしかない。欽定訳聖書のように、現在『聖書』として読まれている書物中に、相応によって書かれていない文書が存在するが、それらは、スウェーデンボルグによれば聖言ではない。靈的意味があるもののみが聖言である。

『天界の秘義』という膨大な著作は、創世記と出エジプト記について、一語一語その内的意味を解説した書物である。したがって、スウェーデンボルグの著作から聖言の靈的意味の例をあげればきりが無いが、ここではスウェーデンボルグの著作でもっともポピュラーな『天界と地獄』の冒頭に取り上げられているもので代表させることにしよう。

それはマタイ福音書の第24章にある、代の終わりについてのイエスのことばである。「そのときに起こる患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星々は空から落ち、天体はゆり動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族はなげき、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗ってくるのを、人々は見るとであろう。また、かれは大いなるラッパの音とともに、み使いたちをつかわして、天のはてからはてにいたるまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」。

このことばを字義どおりに受け取ることができないことは明白である。太陽や月が暗くなることはないし、地球よりはるかに巨大な星が地上に落ちることはありえない。イエスは相応で語ったのだとスウェーデンボルグはいう。それ

ではその霊的意味とは何か。

「日」とは愛の面から見た主である。「月」は信仰の面から見た主のことである。「星々」とは善と真理の認識であり、「天に現れる人の子のしるし」とは神の真理の出現である。「主が、力と栄光とをもって天の雲に乗ってこられる」とは聖言のうちに主が現存していること、「雲」は聖言の文字の意味、「栄光」は聖言の内的意味のことである。「大いなるラッパの音とともに来る天使たち」は神の真理の出てくる天界を意味する。以上、要するに、この主のことばの霊的意味は「愛も信仰も失われた教会の末期に、主は聖言の内面の意味をひらき、天界の秘義を啓示する」ということである。

6. 相応は古代人の知識

スウェーデンボルグによれば、創造のとき以来、この地上には四つの教会があったという。一番目の教会は最古代教会と呼ばれる洪水以前の教会である。二番目の教会は古代教会と呼ばれるアジアにあった教会で、これは偶像崇拜によって消滅した。三番目の教会がイスラエル教会、そして四番目がキリスト教会である。これら四大時代であるが、第一は「黄金時代」、次は「銀の時代」、第三は「銅の時代」、そして第四は「鉄の時代」であった。彼の説によると、人間は古い時代ほど天界に近かったらしい。人間が相応の知識を失ったのも、自己愛と世間愛によって天界から心を引き離してしまったからであるという。

彼によると、古代人は現代人と同じがって相応を知っていた。相応こそ彼らの最高の知識であった。相応をとおして、理知と英知を汲みとった。彼らは相応をとおして天界と交流をもっていた。相応の知識は天使の知識であり、天界的な人間であった最古代の人たちは、相応をとおして、天使と同じように考えた。だから天使たちとことばを交わし、主も彼らにたびたび姿を現し彼らを導いた。しかし、現在ではこの知識はことごとく消滅し、相応が何であるかさえ知られていない。

7. 霊界で得られる知識

スウェーデンボルグは相応を霊界で、天使や霊との交流によって知ったという。天使たちが理解に関わることを話すと、その天使たちの下にある霊の世界には馬が現れてくる。そして天使たちの理解に応じて、馬はそれに対応した姿をとる。また、天使たちが善い情愛について話していると子羊、羊、子山羊、雌山羊、子牛等が示され、悪い情愛について話すと虎、熊、狼、蛇、ねずみ等が示されるといったぐあいである。天界は天界の光の中にあるが、悪と誤謬の中にいる霊が得ている光は迷妄の光、火のついた炭から発するような光であり、天界の光がさしてくると消滅し暗闇になる。このような無数の体験からスウェーデンボルグは相応について教えられたというのである。

以上が、スウェーデンボルグの相応の考え方の概略である。繰り返し述べるが、スウェーデンボルグ神学はこのような相応による聖書解釈である。

IV. リード『心の成長に関する観察』

次に、宗教、科学、芸術を総合した決定的な美学研究書であり、ニューイングランドの超越主義の精神的支柱になったといわれる⁽¹³⁾リードの主著『心の成長に関する観察』を取り上げ、その中にいかにスウェーデンボルグの思想が反映されているかを検証してみたい。この書は一続きの文章であるが、便宜上、序論、本論、結論に分けてみよう。序論では、新時代が到来したと主張している。本論は三部構成で、自然と社会と聖書について論じられる。リードによると、これら三つが人の心を成長させる要素である。最後に、役立ちの生活の重要性を指摘して議論は閉じられる。以上のような構成になっているが、以下では、最初にこの本のさらに詳細な要約をし、次にスウェーデンボルグとの関連を考察しようと思う。

(13) Miller (1950), p. 53.

1. 新時代の到来

『心の成長に関する観察』が刊行された1826年は、アメリカ合衆国憲法の発効から約一世代が過ぎ、これから平等主義的なジャクソン主義デモクラシーの時代が始まろうとする時期であった。そのような時代風潮も反映しているのだろうか。この書物は新時代が到来したという楽観的な希望に満ちたことばで始まっている。

世界が変化したということ以上によく知られた重要な話題はない。従来と比較すると、はるかに広範な思想の交流、より強力な精神の相互作用がある。すべての国々の善人と賢人はいっそうひとつになって力を行行使い始めている。それはまだ幼年期のような弱さがあるとはいえ、世界中で感じられる。世論とは世界の最終目的地を決定する事件の舵取りをするようなものであるが、それは新しい方向を受け入れた。精神は上向き・前向きのまなざしを獲得した。そして過去の誤謬と偏見をふるい落としつつある。⁽¹⁴⁾

新しい時代はすべてがよい方向に変わる。リードによれば、これまで人間の道徳的・知的性格は変化してきたし、現在も変化しつつある。したがって、それがあらゆるものごとの局面を変化させるにちがいないという。では何がその変化を引き起こしているのでしょうか。彼によると、それは「啓示」である。

人間は自分自身の力について思いをめぐらしているが、啓示という確実な、しかし秘密の影響力が徐々に世界の道徳的・知的性格を変化させている。⁽¹⁵⁾

科学や芸術の変化は全体として啓示の効果であることも注目されるであろう。・・・あらゆる精神のあらゆる力に正しい方向性を与えることが啓示の傾向である。これが実現するとき、もちろん発明や発見が続くであろ

(14) Reed (1992), p. 17.

(15) Ibid., p. 18.

う、すべてのものが異なる様相を呈するであろう。そして世界そのものが楽園になるであろう。⁽¹⁶⁾

新時代が来る、それは超自然的な啓示から始まるという書き出しは、やや唐突な印象を与える。この啓示が何かについて、ここではリードは詳しくは書いていないが、後にスウェーデンボルジャンであることをはっきり認めたので、スウェーデンボルグに与えられた啓示であることは明らかである。1838年版の序文では、彼はこの本を新教会の人々に捧げると記し、「神のもとを出て天国から降ってくる新しいエルサレムに読者の足が向かうように」ということばで序文を閉じている。⁽¹⁷⁾要するに、リードがここで思い描いているのは、スウェーデンボルジャンのいう新教会、新時代である。すでに霊界において最後の審判が行われ、そこに「新天新地」すなわち新しいキリスト教の天界と教会が出現し、そこから新しい教会が地上にできつつあるという希望である。

2. 精神の法則がある

啓示によって正しい方向に世界が変わるという理由は、あらゆる変化は心の変化から始まるからである。ところで、物質世界には自然の法則があるが、精神世界にはそのようなものはないと思われている。しかしそうではないとリードはいう。「精神の法則は、それ自体、物質の法則と同様に⁽¹⁸⁾安定的であり完全である。ただ、人間はその法則からはずれてしまっている」。だから啓示こそが、すべての人の心の力を正しい方向に向けさせるというのである。物質の法則と同じように精神の法則があるという主張は、エマソンの『自然』の中でも同じように印象深く語られている内容である。

これにつづいて、リードは「記憶と情愛について」「記憶と時間について」「時間について」「神の働きについて」「情愛について」などスウェーデンボルグ神

(16) Ibid..

(17) Ibid., p. 49.

(18) Ibid., p. 19.

学を想起させる議論を展開しているが割愛する。

3. 自然が心の発達に与える影響について

3.1 自然がつくられた目的がある

この世に生まれてきた人間にとって、心の発達の第一段階が自然について知ることであるというのは自明のことである。しかし、リードにとって自然はそれ以上の存在である。自然は知的・道徳的目的のために存在する。宇宙万物が偶然にできたものではなく、神の計画によって創られたものであること、また万物には役立ち use があることが述べられている点が注目される。

自然哲学は、思想と行動の賢明な独立にとって不可欠であるように思える。人が他者にもたれかかると、あらゆる方向から同じ圧力でうまく支えられ、一見だれにも依存していないように見えるかもしれない。しかし彼の精神がこの不変の基礎（自然界）に向けられていなければ、その独立は頑迷さに墮落したり、弱さとなったりしがちである。「世界」の知識は彼の感情に流通性を、彼のふるまいに信頼性を与えるであろう。しかしそれ以上に、それは道を照らす光、目的に安定性を与える世界の知識である。それによって、どんな硬貨が流通しているか、何に内在的価値があるかを知るであろう。自然界はまさに完全に知的人間・道徳的人間を鼓舞し励ますようにつくられた。その最初の至高の役立ちは、大地を飾る植物や大地を覆う動物を養うことではなかった。人間の肉体を扶養することでもなかった。自然にはより高次の神聖な目的があって、これらはその達成のための手段にすぎないのである。それは魂の潜在的活力を引き出し完成させるという意図である。すなわち、潜在的活力に生氣とみずみずしさを与えることであり、自然の神秘への手ほどきをすることであり、そして死によって自然が取り去られるときには、造物主への無言の謙遜な依存によって、主の似姿の完全な印象を残し続けることである。⁽¹⁹⁾

3.2 自然から科学と詩と音楽が生まれる

自然への愛から科学が生まれ、人の心を育てる。たとえば植物界の美を見る喜びから植物学が生まれるように。これは自然の役立ちである。しかし、自然は科学だけではなく、詩と音楽をも生み出すとリードはいう。

自然諸科学が、人間の心からおのずと生まれてくるのであるが、このように、それは神の摂理の継続的な働きなのである。これらの科学に、詩と音楽が付け加えられなければならない。なぜならわれわれが神の作品をしかるべく研究するとき、これらの芸術の源泉となる固有の美と調和を無視することはできないからである。これらは、口に入った食べ物の味のように、心の中に最初のうれしさを生じさせる。そしてその喜びは、後で科学によって与えられる力と勇気の証である。詩によって、自然の表象によるすべての真理の描写が意味される。それは、この世界がそれを創造した主の鏡であるという事実から生じるのである。⁽²⁰⁾

3.3 ものの言語がある

リードによると、創造は神の愛と知恵の結果 effect である。また、自然は神の美の表象 image である。そこからものの言語があるという考えが生まれる。詩はものの言語によって真理を表現するものである。リードは次のように述べる。

ことばの言語ではなく、ものの言語がある。この言語がはっきりと識別されるようになったとき、人間的なものがその目的に答えているであろう。そしていわばそのもともとの要素に還元されることは、事実上その言語自体を失うことになる。言語の使用は感情や欲望の表現であり、精神の表れである。しかしすべてのものは、動物であれ植物であれ、それ自身

(19) Ibid., p. 29.

(20) Ibid., p. 31.

の存在の表現のみならず、それが設計された役立ちの表現に満ち溢れている。もしわれわれがその言語を理解するなら、ことばは何をその意味に付け加えることができようか。われわれが聞こうとしないから、多くを語らねばならないのである。そして耳障りな無数のわけのわからないことばで、自然の言語を葬ってしまうのである。人の言語を彼の心に現に属するものの表現に限定させよ。そして出てくるいちばん小さな若葉を妨害せず、それ自身に語らせよ。そうすれば詩があるであろう。おそらくそれは書かれないかもしれないが、われわれの存在の一部として感じられるであろう。われわれを取り巻くすべてのものは、ひとつのことばの発言に満ち満ちており、完全にその本質を表している。⁽²¹⁾

ここで、彼は相応について述べているのである。相応があるから自然は言語である。ただし、「神は万物を創造し名前を与えているが、・・・人間は自分の力を乱用し、被造物の真の正確を感じるができなくなった⁽²²⁾」と、相応による言語があるにもかかわらず、現在、われわれはそれを理解していないとリードはいう。

3.4 音楽は創造の秩序の調和である

リードによれば、自然は科学だけでなく、詩と音楽をも生み出す。そして音楽とは、彼によれば、創造の秩序の調和を意味する。

音楽とは天使や人間の歌のような合理的世界に存在するものだけではなく、また、情愛や欲求を知らせる鳥の歌や家畜の鳴き声だけではなく、あらゆる創造の秩序に広がる調和を意味する。宇宙的自然というハープの音楽、それは太陽の光によって触れられる。その歌は朝であり、夕べであり、⁽²³⁾四季である。

(21) Ibid., p. 33.

(22) Ibid., p. 34.

詩と音楽を論じるところは、あらためてこの書が「美学研究書」であるということを思い起こさせる。

4. 社会が心の発達に与える影響について

4.1 社会も心の発達に影響を与える

心の発達に影響を与えるものは第一に自然であり、第二に社会である。リードは自然について多くを語ったが、社会についてはやや短い言及にとどまっている。

心の発達において一般に自然が与える影響力について十分に語られた。現実の社会の状態が、それに劣らず同じ効果を生み出す働きがある。これには自分自身の国の宗教制度や社会制度、それらの起源となっている独特の気質、そして過去の知識が含まれる。ものごとの起源と進展を明らかにすることによって、われわれの前にある見通しに光が投げかけられる。自然界と結びついた哲学が心のよりどころとなり、それによって心は、永遠の運命は自分自身の手中にあるという人間にふさわしい独立心をもつようになる。それと同様に、道德制度や社会制度、すなわち社会の現状は、それを取り巻き保護する大気であり、その中でそれは枝を広げ実を結ぶのである。⁽²⁴⁾

4.2 社会の影響力は十分ではありえない

社会は心の発達に貢献するが、それは十分とはいえないとリードはいう。それは人間が墮落しているからである。

かくして、子どもがこの世に来ると、直ちに、自然界の状態と社会の状態の両方が作用して、子どもの心の活力を引き出す。もし人間が創造され

(23) Ibid..

(24) Ibid., p. 35.

た本来の秩序を保持していたなら、この影響力は、神の力と合わせて十分であったであろう。それは神のすべての目的のために十分であるように設計されたのであるから。まさに神の美の鏡である自然、そしていっそう神に近い純粋な情愛、それらはいっしょになって幼子の心に働きかける。その効果は、自然世界の産物の間で見られる成長の過程と同じように、確実であるように思われるであろう。しかし、人間は墮落している。そのためこの影響力の働きは、社会の状態の違いに応じて異なる結果を生み出すかもしれない。しかし、どこにおいても、それは人間が創造された目的である役立ちと幸福の生活を可能にするほどには決して十分ではない。社会の影響力は十分ではありえない。なぜならそれは人間をそれ自身の水準以上に引き上げることはできないからである。地上の社会はもはや天界の社会ではないのである。⁽²⁵⁾

5. 聖言が心の発達に与える影響について

社会の影響が心の発達にとって十分ではないために聖書があるとリードはいう。

そこで、秩序ある心の発達にとって必要なもうひとつの力がある。聖言の力である。これはこれまで述べてきたところすべてにおいて示唆されてきたことである。心の中のいかなる考えも、外見がどうであれいかなる努力もそれと無関係ではない。啓示はわれわれが会うあらゆるものと交じり合っているので、われわれの状態が、それによって影響を受ける程度をはかることは容易ではない。その影響は、最初は奇跡と思われる。しかしそれが確立されてしまうと、心は自然の通常的作用におけるように、それらを生み出した力を意識しなくなりがちである。すべての成長あるいは発達は、内部から外部へともたらされる。動物もそうであるし、植物もそう

(25) Ibid., pp. 36-37.

であるし、肉体もそうであり、心もそうである。肉体の内部に魂があるように、魂の内部に力がなければ、それが生存できる可能性はないであろう。物質的部分の成長は霊的なものの存在にかかっている⁽²⁶⁾ということは、死に際して、前者は朽ち果てるという事実から明らかである。

あたかも太陽が植物を成長させるように、聖書は人の心を育てる。

人間と神を結びつけることが聖書の唯一の目的である。これが達成されれば、いかなる方法で聖霊は内部的に働いて発展を生み出しうるかが理解されよう。それは単なるたとえ話ではない。自然の太陽の力が植物の成長にとって必要であるように、神の霊は心の成長にとって必要である⁽²⁷⁾というのは単純明快な真理である。

聖書には秘密の力があって、それは物質世界における太陽同様、道徳的、知的世界に対して影響を与える。だから、もし子どもを真に詩人の作品に親しませるのが望ましいとすれば、詩と辞書を彼の手において学ばせたりしないであろう。むしろ詩の力を彼自身に呼び起こすものに親しませるであろうとリードは言う。神が常に存在し働いているという感覚を養い、神の霊が彼の心にしみこむように、内部の至高の存在が宿る部屋へと導くであろうと。

6. 心の成長にとって自然科学・社会・聖書が必要

これまでの議論を要約して、リードは、心の成長にとって次の三つの要素が必要であると指摘する。

一般的に言って、私はこれまで、自然諸科学と社会の状態と神のみことばが、いかなる意味であらゆる精神の発達にとって必要であるかを描こう

(26) Ibid., p. 38.

(27) Ibid., p. 39.

と努めてきた。その際、大地と大気と太陽がひとつになって自然の生産物を生み出すというアナロジーを使った。しかし、だれもがもっている特別の力を十分に発揮させるのに必要なこの発達に関して二三語らなくてはならない。⁽²⁸⁾

このように述べて、リードは最後に役立ち usefulness の生活の重要性を説いてこの書を閉じている。集団として、あらゆる国民に固有の能力がある。あらゆる国民がその能力を十分に発揮すれば、世界は各部分からなるひとつの体のようになるであろう。軍隊は不要になり、それは労働者の組織に変わる。個人レベルでいえば、誰もが固有の能力、他の人間より上手にやれる何かをもっている。したがって人間には天職がある。大切なことは、人間が個人としても集団としても役立ちを果たすということである。「あらゆる教育の目的は、活動的な役立ちの生活であるということをわれわれの心に刻まなくてはならない」。⁽²⁹⁾

7. スウェーデンボルグのリードへの影響

以上要約したリードの著作をスウェーデンボルグとの関連で考察してみよう。

- (1). 啓示によって新時代が来ているという主張の「啓示」は、スウェーデンボルグに与えられた啓示であることは上に説明した。
- (2). 物質の法則と同じように精神の法則があるという主張は相応の考えと密接に関わっていることは明白である。関連する箇所をスウェーデンボルグから引用しておきたい。『真のキリスト教』第71節で彼は次のように述べている。「神は全霊界の秩序にもとづいて人間の合理的精神をつくり、全自然界の秩序にもとづいて人間の肉体をつくった。そのため古代から、人間は小天界あるいは小宇宙といわれてきた。ここに秩序の法則が生まれた。すなわち人間は、自分の小天界または小霊界から、小宇宙と小自然を

(28) Ibid., p. 46.

(29) Ibid., p. 48.

治めなければならない」。

- (3). 宇宙は偶然にできたものではなく、神の計画によってつくられたものであり、万物に役立ちがあるとリードは述べている。スウェーデンボルグ『神の愛と知恵』第314節には次のように書かれている。「宇宙の創造は、(霊界の)太陽に取り囲まれた第一者、すなわち主から、大地という最終・末端にいたるまでの進展であるとともに、役立ちをとおり、大地から始まって、その第一者である主へ戻ることである。また、全創造の目的は役立ちである」。なお、役立ち *usus*, *use* はスウェーデンボルグ神学のキーワードのひとつである。
- (4). 自然は科学のみならず詩と音楽を生み出すとリードはいう。詩と音楽はスウェーデンボルグ神学にはほとんど出てこないことばである。スウェーデンボルグの神学書は徹頭徹尾、哲学的、科学的である。ただし美学は論じないが、相応による天界の描写それ自体が神々しい美の世界になっている。
- (5). ことばの言語ではなく、ものの言語があるという考えも相応から出てくる。これは上に要約したスウェーデンボルグの相応の説明で明らかにされている。ものの言語で真理を語るのが詩であるというのはリードの美学である。
- (6). リードの社会の影響についての議論は、とくにスウェーデンボルグと直接の関係はないであろう。
- (7). リードは人間と神を結合するのが聖書であるという。ここで「結合」ということばを使っているところが、まさしくスウェーデンボルジャンといえよう。スウェーデンボルグは「人に内在する神」を説く神学の系譜に属する。聖書は単に人間を教え、導き、救うだけでなく、人間と神を結合するのである。スウェーデンボルグの『結婚愛』第128節には次のように書かれている。「聖言は主が人に結びつくための媒介であるとともに、人が主に結びつくための媒介でもある。なぜなら、聖言の本質は、神の善と一体化した神の真理であるとともに、神の真理と一体化した神の善だからで

ある」。

- (8). リードが最後に取り上げた役立ちの生活も、スウェーデンボルグに由来する。役立ちとはスウェーデンボルグ神学の中心概念のひとつである。『神の愛と知恵』第308節には次のように書かれている。「創造主である神からでなければ何ものも実在しえない、神は役立つもの以外には何ものもつくりえないということを考えると、創造の目的が役立ちであることがわからないものがあるだろうか」。

以上のように、リードの『心の成長に関する観察』は全体として、スウェーデンボルグの神学、哲学を土台にしている。ただし、リードの著作には詩と音楽というスウェーデンボルグが神学著作で論じなかった美学のテーマを取り上げているという新しさがある。もちろん、それもスウェーデンボルグが論じた相応に由来するのであるが。

V. スウェーデンボルグのエマソンへの影響

このように、スウェーデンボルグ、リードと見てくると、これまでいかにもエマソンらしいと考えられてきた主張の中に、スウェーデンボルグの影響がしっかりと刻印されていることがわかるであろう。そのいくつかを取り上げてみよう。

1. 古代の知識

エマソンはリードをとおしてスウェーデンボルグの影響を受けたが、とりわけ彼の代表作である『自然』にはその影響が顕著に見られる。その出だしの部分は、スウェーデンボルグの「最古代教会においては相応はありふれた知識であった」ということばを強く想起させる。スウェーデンボルグによれば「最古代教会の人々はものを見るとき自然的に考えるだけでなく、同時に霊的にも考え、その結果、天界の天使と結ばれるような英知をもっていた」という。エマソンは次のように書いている。

昔の人びとは、面と向かって、神と自然とを見た。われわれは、彼らの目を通して見ている。なぜ、われわれも宇宙に対して独自の関係をもたないのであろう。なぜ、われわれは伝来のものではなく、直感の詩と哲学をもち、祖先の宗教ではなく、われわれに啓示された宗教をもたないのであろう。⁽³⁰⁾

2. 自然の言語

エマソンの『自然』はその第4章こそがかなめであるといわれる。⁽³¹⁾ 第4章のタイトルは言語である。リードは「ことばの言語ではなく、ものの言語がある」と述べたが、それとまったく同一内容がここで扱われている。この章ではスウェーデンボルグが詳細に展開した相応の考え方が、しばしばほぼそのままの形で引用されているので、前掲のスウェーデンボルグのことばと比較してみたい。

言語は、「自然」が人間に仕える第三の役立ち use である。自然は、思想を伝えるものである。しかも単一、二重、三重の意味において、そうである。

1. ことばは自然の事実の印である。
2. 特定の自然の事実は、特定の精神的事実の象徴である。
3. 自然は、精神の象徴である。⁽³²⁾

次の文章は、スウェーデンボルグのいう「天界にあるすべてと地上にあるすべての相応」を思い起こさせる。

道徳に、あるいは理知に関係した事実を表現するために用いられるあらゆる言葉は、その語源をたどると、物質の外観からかりたものであること

(30) 齊藤光編訳 (1960), 45 ページ。

(31) 同上, 281 ページ参照。

(32) 齊藤光編訳 (1960), 64 ページ。ただし、use の訳語は功利主義を連想させる「効用」ではなく「役立ち」に変えた。

がわかる。「正しい」right は「真直ぐな」straight という意味であり、「不正」wrong は「曲がった」twisted という意味である。・・・われわれは、感情をあらわすために「心臓」heart といい、思想をあらわすために「頭」head⁽³³⁾ という。

自然のすべての事実は、ある精神的な事実の象徴である。自然のあらゆる外貌は、精神のある状態に対応している。そしてこの精神の状態は、これが絵のように描かれている自然の外貌を示すことにより、はじめて説明することができる。激怒した男はライオン、狡猾な男は狐、堅実な男は岩、学識のある者は灯火である。子羊は無邪気、蛇は陰險な悪意である。⁽³⁴⁾

3. 精神の法則

リードは、精神の法則と自然の法則が対応すると述べたが、同様のことをエマソンも述べている。

世界は象徴的である。品詞は比喻である。それは、自然全体が、人間精神の比喻だからである。精神の法則は、ちょうど鏡のなかで相対するように、物質の法則に対応する。⁽³⁵⁾

感覚で知りうる対象は、「理性」の予告に従い、良心を反映する。すべての事物は道徳的であり、事物が際限なく示す変化において、絶えず精神性に関連している。・・・自然はいつでも「宗教」の同盟者で、そのすべての壮麗な外観と富とを、宗教的情操に貸し与えている。⁽³⁶⁾

(33) 同上, 64-65 ページ。

(34) 同上, 65 ページ。

(35) 同上, 70 ページ。

(36) 同上, 78 ページ。

自然のあらゆる過程は、道徳を表した文章の翻訳である。道徳律が、自然の中心にあって、これが周囲に光を放っている。これがあらゆる実体、あらゆる関係、あらゆる過程の真髄である。われわれがとりあげるあらゆるものが、われわれに説教する⁽³⁷⁾。

4. 役立ち

エマソンは役立ち *use* というスウェーデンボルグ神学独特の用語をいたるところで使っている。「自然の役立ち」「自然史の役立ち」「偉人の役立ち」などであるが、彼のいう役立ちとは善をなす、義務をはたすといった意味であり、功利主義的な効用 *utility* とは異なる。エマソンは功利主義的な効用の概念に道徳性がないことを批判したし、ベンサムにも批判的であった⁽³⁸⁾。

日用品の役立ちは、「役立ち」の理論を、人の心に教えてくれる。つまり、ものは、これが役立つかぎり、よいのであり、才能と努力をひとつに⁽³⁹⁾合わせて、ある目的を生み出すことは、いかなるものにも必要である。

5. エマソンのスウェーデンボルグ評

以上から、エマソンの著作には、スウェーデンボルグのアイデアがふんだんに盛り込まれていることが明らかである。とくに比較的初期の著作には、率直なスウェーデンボルグ賞賛が見られる。エマソンのスウェーデンボルグ評を初期の著作からさがしてみよう。「アメリカの学者」において、エマソンは「一滴の雫は、小さな大海です。人一人は自然全体と関連しています」と相応の概念について触れ、そのような考え方の代表者としてスウェーデンボルグを紹介し、次のように述べた。

(37) 同上。

(38) Hallengren (1988), 236, 237 ページを参照。

(39) 斉藤光編訳 (1960), 79 ページ。注 31 参照。

一人の天才で、この人生哲学のため多くのことをし、しかもその文学者としての真価がまだ正しく評価されていない人がいますが、それはエマニュエル・スウェーデンボルグです。非常に想像力の豊かな人で、しかも数学者のように正確にものを書く彼は、彼の時代に広く行われていたキリスト教に、純哲学的な倫理学を結びつけようと努めました。このような試みは、もちろん困難なことに相違なく、どんな天才でもこの困難に打ち勝つことはできないでしょう。しかし彼は、自然と霊魂との間に関係のあることを洞察して、これを人に示しました。彼は、見たり聞いたり触れたりすることのできる世界の、象徴的な、すなわち精神的な性格を見ぬいたのです。⁽⁴⁰⁾

VI. おわりに

リードもエマソンもスウェーデンボルグ神学、とりわけ相応の考え方を著述活動の中心にすえた。当然、述べている内容はよく似ている。しかし、両者のたどった道は対照的なものであった。リードはスウェーデンボルグジャンであることを公言したが、エマソンはスウェーデンボルグの概念を取り入れながらも、スウェーデンボルグジャンとは言わずに、超越主義者の代表になった。エマソンは常にスウェーデンボルグを偉大な人物として尊敬していたにもかかわらず、「抹香臭いスウェーデンボルグ」には辟易していたようである。

両者の対照的なスウェーデンボルグに対する評価が、1838年版のリード『心の成長に関する観察』のまえがきと、1850年のエマソン『代表的人間像』の中に見られる。リードは次のように述べた。「聖書の霊的意味の真実を、主はご自身の僕エマヌエル・スウェーデンボルグをとおして啓示された。・・・結論として、私は本書を新教会と新教会に近づこうとしている人々にささげたい」。一方、エマソンはスウェーデンボルグを「シーザーもその威風にうたれ、リクルゴスでさえ脱帽するほどの人物である」といいながらも、「スウェーデンボルグの精神に巣くう悪徳とは、神学に徹しようとするその決意である」と述

(40) 同上、145 ページ。

べる。⁽⁴¹⁾「げんみつにいえば、スウェーデンボルグの啓示は、さまざまな次元を混同したものであり、このことは、これほど学識のある分類家にとって、まことに許すべからざる罪である」⁽⁴²⁾」。

エマソンのこれほどの辛らつなスウェーデンボルグ批判は、リードの厳しい超越主義批判に対応するようにも感じられる。1838年に、リードは超越主義について次のように述べた。「しかし（スウェーデンボルグの）真実が受け入れられることは期待できない。むしろ人間自身の頭脳の産物である超越主義が好まれるであろう。・・・超越主義がこの国で人気を博す兆しがある。・・・感覚中心主義から超越主義へは一步前進かもしれない。それは人間の心の進歩における必要な一步かもしれない。しかし両者はなお近いところにいる。・・・超越主義は感覚中心主義の寄生虫である。それが仕事を終えたとき、それは寄生虫であり、寄生虫の子孫であることが明らかになるであろう。われわれが命に入ることができる、あるいは生きた真理を受け取ることができる唯一の扉は聖書である。それ以外の道からよじ登る者はすべて泥棒であり強盗である」⁽⁴³⁾。

リードはなぜこれほど厳しく超越主義を批判したのであろうか。ここで「唯一の扉は聖書である」と強調しているように、彼は、超越主義が神から離れる危険な道を歩み始めたと危惧していたのである。神から離れることによって、「自己信頼」が「自己愛」へと堕ちる可能性がある。リードの批判は、エマソンへの名指しの批判ではなかったが、超越主義の指導者的存在であったエマソンは、当然これを自分に対する批判と受けとったであろう。エマソンは後に、リードの信奉するスウェーデンボルグを辛らつに批判することで、これに返礼したように思われる。

シルビア・ショーは、このリードの超越主義批判によって超越主義者の間での彼の人気は消滅したと述べているが、エマソンの日記を見るかぎり、彼のリードへの敬愛の念は終生続いたように思われる。スウェーデンボルグについて

(41) 酒本雅之訳 (1961), 86 ページ。

(42) 同上, 103 ページ。

(43) Reed, (1992), p. 52.

も、エマソンは、日記においては一貫して好意的な評価をしていて、批判的な論評がほとんど見られないのも興味深い。エマソンの本心はどのあたりにあったのであろうか。

公表された文章で判断するかぎり、エマソンはスウェーデンボルグを究極の詩人とみなしたのだといえる。⁽⁴⁴⁾ 他方、リードはスウェーデンボルグの著作をキリストの再臨の書とみなしてスウェーデンボルグジャンになった。リードは1838年までには、聴衆を喜ばせたり経歴を守るよりは真実を語ることが人間としての義務であると考えようになっていたのである。その結果、エマソンは超越主義者として名声を博したが、リードは望んだ職業の夢も著述家としての名声も失った。「 Sampson・リードは道徳的立場をとり、その代価を支払ったのである」とショーは評している。

引用文献

- Emerson, R. W., (1963), *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralf Waldo Emerson* Vol. III 1826-1832. (The Belknap Press of Harvard University Press).
- Emerson, R.W., (1982), *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralf Waldo Emerson* Vol. XVI 1866-1882. (The Belknap Press of Harvard University Press).
- Hallengren, A., (1988), "The Importance of Swedenborg to Emerson's Ethics." In Brock, E. J. et al. ed., *Swedenborg And His Influence*. (The Academy of the New Church).
- Hallengren, A. (1998), *Gallery of Mirrors: Reflections of Swedenborgian Thought*. (Swedenborg Foundation).
- Miller, P. ed., (1950), *The Transcendentalists*. Cambridge: Harvard University Press.
- Reed, S., (1992), *Sampson Reed: Primary Source Material for Emerson Studies*. (Swedenborg Foundation).
- Shaw, S., "Preface". In Reed, S., (1992), *Sampson Reed: Primary Source Material for Emerson Studies*. (Swedenborg Foundation).
- Swedenborg, E. (1749), *Arcana Coelestia*.
- Swedenborg, E. (1758), *De Caelo et ejus Mirabilibus et de Inferno*.
- Swedenborg, E. (1763), *Sapientia Angelica de Divino Amore et de Divina Sapientia*.
- Swedenborg, E. (1772), *Vera Christiana Religio*.

(44) Shaw (1992), ix 参照。

齊藤光編訳（1960）『エマソン選集 1：自然について』（日本教文社）.
酒本雅之訳（1961）『エマソン選集 6：代表的人間像』（日本教文社）.